
ホワイトクリスマス

Jackie

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホワイトクリスマス

【Nコード】

N1345J

【作者名】

Jackie

【あらすじ】

とある町でのクリスマス。バイト仲間にロリコンって言われたり、オタクな幼馴染みと過ごしたり、死んだはずのお母さんにであったり。色んな人の、久しぶりに雪が降った日のお話。オムニバス形式なので、どこから読んでもOKです！

亮也

「はいっ、熱いから気をつけてね」

「ありがとうお兄ちゃん！」

につこり笑って手を振ると同時に、リン、とベルの音と一緒に冷たい風が吹き込んできた。

ガラス扉の向こうで、小学生くらいの女の子が、あんまんを三つ抱えて走っている。

「可愛い、なあ」

「……ロリコン」

思わず呟けば、隣にいた木之下きのしたさんがボソリと呟く。

いや……別に恋愛対象として見てる訳じゃないし、単に小さい子が好きなだけだって……。

そうそう、loveじゃなくてlikeみたいな？

だから僕は別にロリコンじゃない……はずだ。

もう一回リン、とベルが鳴ると、今度は見知った顔が現れた。

「亮也くん、海さん、こんにちわー、遅れてませんよね？」

「あ、こんにちわ！ ええ、まだ余裕ありますよ」

「よかったあ！ 今日ちよつと家出るのが遅かったから……」

次のシフトの人だ。

お客さんもいなかったら、ちよつと雑談してたら、奥から先輩が顔を出した。

「あら中田さん、こんにちわ。じゃあちよつと早いけど、新野^{にいの}くんもあがつていいわよ」

まだ5時前だけど、ご好意に甘えさせてもらうことにする。
ロッカルームに向かうと、自分の服に着替えて鞆を肩に引っ掛ける。

「じゃあお先に、お疲れ様っす」

挨拶をして外に出ると、予想外に風が冷たくってちよつと肩をすくめた。

コンビニの中あったかかったしな……ああ、こういうとき猫とか犬とかいたらあったかいのになあ。

マジでペット飼おうかな、どうせ一人暮らしだし。

家に帰った時誰も待ってないってのは寂しいもんだ、いくら慣れたとはいえ。

くだらないことをつらつら考えながら、一人寂しく家路に着く。
コンビニから少し離れたところの大きなツリーの近くで、思わず足を止めた。

来る時には見かけなかったダンボールの箱を見つけたからだ。

——それだけじゃなくて、その箱の中からちいさな鳴き声が聞こえてたんだ。

思わず近寄って、そつとふたを開けると、白い塊が飛び出してきた。
飛びつかれてきた勢いで、バランスを崩してその場でしりもちをつく。

「うわあっ！ え、わ、ちよつ……！」

顔舐めんなよ、くすぐりたいから！

……白い塊はどうやら犬だったらしい。

パツと見た感じ、まだ子犬みたいだ。

丸くて黒い、きらきらした眼でこっちを見てくる様子があんまり可愛かったから、思わずぎゅっと抱きしめた。

「…………可愛いーっ！」

なんなんだこいつは！

クリスマスの贈り物か！？ そうだよな！

ふわふわの子犬はあったかくて、頬が緩むのを抑えられなかった。

ああ、周りから見たら、俺、変な人にしか見えないのかな……よし、とりあえず移動しようか。

少しだけコンビニの方向へ戻ったところにある公園のベンチに座った。

子犬を膝の上に置くと、きょとんとした感じの顔で見上げてきたのが可愛くて、思わずまた抱きしめた。

うわあ……可愛いなあ、天使だ天使！

嬉しくってニコニコ笑ってたら、いきなり後ろから声を掛けられた。

「新野くん、あなた変態にしか見えないわよ」

「…………木之下さん？」

後ろにいたのは、呆れた顔をした、私服姿の木之下さんだった。

……………風が冷たいね、うん。

陸

「……駄目だった」

「そう、か」

ああもう、そんな泣きそうな顔すんなって、とかいいながら頭をぐしゃぐしゃ撫でてやれば、涙目で睨まれた。

そんな顔で睨まれたって怖かねえよ——俺にどうしろっていうんだ！？

俺の幼馴染み、梨衣^{りい}夜が惚れたのは、俺達の一学年上の先輩だ。

普段はフワフワしてるのとは裏腹に、一旦アルトサックスを構えれば人が変わる。

確かにその様子は、男の俺から見たってかつこいい。

4月に惚れて以来、俺はずっとこいつを応援してきた。

クリスマスのコンサートが終わったら告白するって決めたのは、丁度一ヶ月くらい前だったか。

「彼女、いるんだって」

「……………」

「知らなかったよ、そんなの」

俺だって知らなかったよ。

けど……それ知ってたって、お前がそんな辛そうな顔するのは一緒だろ？

今にも泣きそうだったら、わざと怒らせるようなことを言ってみた。昔っから、こいつがへこんでた時はこうしてきたし。

「けどさ、よかったじゃんか。お前がオタクだってばれないように
気をつける時間が増えなくて済んでさ」

「わたしオタクじゃない！」

あ、やっぱり、ぷうつと頬を膨らませて怒った。

悪いけど、自分よりもずっと年下の子供が怒ってるみたいに見える
ぜ。

思わず頬を指でつついたら、今度は上目遣いでジトー、と睨まれた。

「好きなだけちよつと詳しいだけだもん」

「俺から言わせりゃ全然ちよつとじゃねえし、のりのりでキャラソ
ン歌ったり物真似する奴は十分オタクだと思っただけだな」

「……むう」

そりゃ、詳しいのは少ないけど……なんせその分深い。

メインキャラのフルネーム、誕生日は勿論、メインじゃないキャラ
の分や、身長なんかも覚えてたりする。

歌うのも好きだからか、クラシック以外にはアニソン、キャラソンの
類をよく口ずさんでいる（そのわりに、最近流行の曲なんかは全然
知らないんだけどな）。

カラオケ行ったらのりのりで歌う。しかも上手い。

ただ、ちよつと声が高いんだが、なぜか淒く似てる。

特徴を上手くつかんでいる、って奴か。

数ヶ月前にはまり始めたアニメ（と、原作の漫画）は、登場人物の
大半が男なのに、その物真似も易々とやってみせる。

このあいだは、チャット仲間と歌った奴を某動画サイトに投稿して
た。

「似てる！」とか「声可愛い！」のコメントが殺到してるのを見た
ときは、さすがにビックリしたけど。

「もういいよう……陸、家帰ってDVD見よ！ 新しいの買ったから！」

「また買ったのかよ……てか切り替え早えな……」

「だって、陸が泣いてるし」

え……………？

今なんて言った？ 俺が、泣いてる？

何故か俺の頬を涙が伝っていたのに気づいた途端、ほぼ無意識のうちに、思い切り梨衣夜を抱き寄せていた。

「陸？」

「悪い、なんでもないんだ」

フワリと、もうすっかり慣れたシャンプーの香りがした。

なんだかんだいって、俺は、こいつのこと、好きだったのかも、な。けど、今の関係を壊したくは無いから、結局何も言わない。

……つもりだったんだけど。

「ねえこれなんてフラグ？ 恋愛フラグって捉えてもいい？」

「……馬鹿、帰るぞ」

こいつが天然なのかそうじゃないのかは、こんなに長い付き合いなのに、結局よく分からないままだ。

まあ、いつか。

「ねえ、今日もお姉さんバイト？」

「多分な、五時半くらいまでだったと思う」

「陸んちで見ようつと」

「おい」

まったく、マイペースな奴だ。

溜息をつくのと同時に、チラチラと白い雪が視界に入った。

「……………雪だ！」

「ホワイトクリスマス、だな」

顔を見合わせると、にっこりと笑った梨衣夜が突然走り出す。

うわ、危なっかしい……………こけるぞ!?

やっぱりこけかけたから、思わず手をつかめば、梨衣夜が驚いたように目を見開いてこっちを見る。

「お前ドジなんだから、気をつけるよ馬鹿あ」

「……………50点かな? もうちょっとツンを出さないと」

「もういいよ……………」

千夏

サンタさんがプレゼントを持ってきてくれる日。

あたしの周りの友達は、みんなそう思ってるんだ。

けどね、あたしにとってクリスマスは、楽しい日なんかじゃ、ない。

毎年この日は絶対に、あたしと隆秋さん——あたしのお父さんの二人でお墓参りにいくの。

お母さん、春菜さんの、ね。

春菜さんはあたしが生まれた年のクリスマスイブに、トラックとぶつかっちゃったんだ。

だけどね、今年はいつもと違うの。

「……千夏ちゃん、もしかしてスパゲッティ嫌いだった？」

そんなこと、ないよ。

スパゲッティも、深冬さん^{みふゆ}も、嫌いじゃないんだけど。

……あたしにとってのお母さんは春菜さんで、どう頑張ったって深冬さんだとは思えないんだ。

そう、深冬さんは、隆秋さんの新しい恋人さんなんだって。

深冬さんのこと、嫌いじゃない、っていうか好きなんだよ？

いっつも笑ってるし、あたしのことも可愛がってくれるし、面白いし……。

けど、あたしのお母さんになるかもって聞いた途端に、どんな風にか話せばいいのかわかんなくなっちゃった。

あたしが食べられなかったスパゲッティは、隆秋さんが食べてくれた。

セットでついてきたオレンジジュースを飲んじやうと、三人でレストランを出る。

ここから春菜さんのお墓があるところまでは、だいたい十分ぐらい。でも結局、着くまであたしは何にも喋らなかった——二人とも色々話しかけてはくれたんだけど。

*

お墓の近くまで来たら、隆秋さんが頭を撫でてくれた。
これはいつもどおりだね。

「さあチィ、春菜さんとお喋りしておいで」

このあいだに、隆秋さんはいつも薔薇の花を買ってくるんだよ。

春菜さんは薔薇が凄く好きだったんだって。

急いで走り出したら、目の端で、深雪さんが隆秋さんに向かって肩をすくめてるのが見えた。

……きつとあたし、あんな態度しかとってなかったから嫌われちゃったんだ。

えーっと、こういうの自業自得っていうんだっけ？

とにかくあたしのせいだったのに、ちよつとだけ涙が出てきちゃって、春菜さんのお墓の前に少し滑りながら座り込んだ。

なんで春菜さんは死んじやったの？

もし生きてたら、こんな風になつたりはしなかったのに……

「春菜さん……」

どうしよう——涙、とまらない。

一人でグズグズ泣いてたら、フワツと薔薇の香りがした。
隆秋さんたちもう来ちゃったの!?

って、慌てて振り向いたら……ねえ、信じられる?

「はる、な、さん……」

「久しぶりだね、チィちゃん、元気にしてた?」

ね、あたし、夢でも見てるのかと思っちゃったよ。

目をパチパチしたら、いつの間にか涙が止まっていたのに気づいた。
春菜さんは、にっこり笑ってた。

「ごめんね、ビックリさせるつもりじゃなかったんだけど……チィ
ちゃんが泣いてたから」

あたしの前まで来てしゃがんだ春菜さんが、まだほっぺたに残って
た涙を拭いてくれた。

思わず抱きついたら、ゆっくり頭を撫でてくれた。

隆秋さんと似てるんだけど、もっと柔らかくて、ちょっとだけ違う
春菜さんの手。

「ねえ、あたしのお母さんは春菜さんだけだよね?」

「そうね……貴女がそう思ってるのなら、そうなんじゃ無いかしら」

「……どういうこと?」

どういうことがよく分からなくて、春菜さんの顔を見上げたら、
やっぱりにこつと笑ってたの。

まるで「すぐに分かるわよ」って言いたいみたいに。

「お母さんは、チィちゃんのこと大好きだよ。ずっと傍にいてあげるから、心配しなくていいからね」

それだけ言っでぎゅっと抱きしめてくれた春菜さん。

もうちよつとだけ、温もりを感じていたくて目を閉じたら、急に冷たい風が吹いてきて、慌てて目を開けたらもう誰もいなかった。

「……春菜さん」

「なあに？」って答えてくれる春菜さんは、あたしの心の中にいたんだ。

ねえ、春菜さん、もしかしてそれを教えに来てくれたの？

あたしはそのまま、隆秋さんと深冬さんがここに来るまで、座り込んだままだった。

*

二人と合流してお祈りしたら、お墓を背にして揃って歩き出した。やっぱり最初の方は静かだったけど、途中であたしから深冬さんに話しかけてみたんだ。

「ねえ……深雪さん、あたしのお母さんになるの？」

急に聞いたから、凄くビックリしたみたい……隆秋さんも。

さつきみたいに二人で目を合わせた後、春菜さんと同じみたいに、にこつと深冬さんは笑ってくれた。

「千夏ちゃんがそう思ってくれるんならね。嫌だったらお母さんじゃなくって、お姉ちゃんでもお友達でもいいんだよ」

「……ほんとに、いいの？」

「いいに決まってるじゃないの！」

笑顔のまま、深冬さんが抱きしめてくれた。

春名さんとも違う、隆秋さんとも違う。

けどね……この温かさ、いつの間にか好きになってたんだよ。

お母さんには思えないかもしれないけど、深冬さんはそれでいいって言うてくれる。

ちよつとだけ、甘えさせてもらってもいい、かな？

「……ね、春菜さん、隆秋さん、お腹すいちゃった」

「そりゃあチイ、あんだけお昼残したら腹も減るだろ？」

「あら、それじゃ、あそこのコンビニであんまんでも買って三人で食べよっか？」

隆秋さんはちよつと困ったように笑ったけど、深冬さんは嬉しそうにお財布を出してくれたんだ。

「あたしが買ってくる！」って言ったたらお金を渡してくれたから、急いで走った。

今度は、さっきみたいに泣いてないんか無いよ、春菜さん！

歌音

『そつか……彼女さん、いたんだあ』

一学年下のチャット仲間の梨衣夜ちゃんが、今日告白するっていうから、いい報告を楽しみにしてたんだけど……。どうやらお相手は彼女持ちだったらしい。話を聞く限りだと、OKもらえそうな気がしたんだけどなあ。

『でね、なんか知らないけど幼馴染みが泣いてた』
『ええ！？』

ちよ、幼馴染みって男の子だったよね確か？
それってさあ……、

「脈あり、だよね」

「え、何が？」

「歌音も好きな子出来たの？」
うたね

「うわっ、音歌にカズくん！ いつの間に！？」
おとが

うわあ、帰ってきたの気づかなかったよ……。

あ、音歌はうちの双子の姉で、カズくんは音歌の彼氏ね！

とりあえず『家族が帰ってきた』とだけ伝えて、梨衣夜ちゃんと次の約束をしたら、チャットの画面を消してパソコンの電源を落とした。

「で、歌音、誰が脈ありだって？」

「あのね、梨衣夜ちゃんの幼馴染みなんだけど――」

「え、梨衣夜ちゃん！？」

名前を出した途端に、カズくんが驚いたように目を見開く。
あれ？　もしかして……知り合い？

「梨衣夜ちゃん、知ってるんですか？」

「後輩に梨衣夜ちゃんって子がいて……」

そこで少し言いよどんで、かわりに音歌が言葉を続けた。

「今日のコンサートの後、その後輩に告白されたんですって」

「……それってやっぱり梨衣夜ちゃんだ、行動パターンがまるで同じ」

まさか……応援していた友達のお相手が、自分の姉の彼氏とは……世間は狭いね。

てか梨衣夜ちゃんってカズくんと同じ高校だったんだ！

カズくん頭いいから、うちと音歌の一ランクくらい上の学校に行ってるんだ。

「じゃあ、あんまり話さない方がいいか」

「……そうだな」

ちよつと申し訳なさそうな顔をするカズくん。

もしかしたら、クズくん、梨衣夜ちゃんのことを妹みたいに思っ
てに可愛がってたのかな？

それだつたら今まで話に聞いてた行動なんかも、納得がいく。
けどなあ……こうなつたら、梨衣夜ちゃんの幼馴染に頑張つても
らうしかないな、これは。

「で、音歌たちはもうデートはいいの？　お邪魔だつたら出て行く

けど」

「違う違う！ 三人で晩御飯でも食べに行こうかと思って」

……それって明らかにうちお邪魔だよね？

本当にいいのって何回も確認した後、ようやく三人で家を出た。

ご飯食べ終わったら……さっさと退散しよう。

家を出たら結構雪もつもってきて、いきなり音歌が転びそうになったた。

気をつけないと。

予想していたとおり、音歌とカズくんが並んで、その後ろをうちが歩く。

……分かってたけどさ、わかってるけどさあ、ちょっと寂しいよね。

*

晩御飯は、近くのファミレスに行った。

クリスマスやけど、まあ所詮高校生だしね。

うちが頼んだのはトマトのスパゲッティ——イタリア行きたいなあ、なんて。

音歌はドリアで、カズくんはグラタン。

サラダは三人で二種類頼んだ。

料理は美味しかったよ、料理は……話には入れなかったけど。

しょうがないから一人で黙々と食べてたら、梨衣夜ちゃんのことをちょっと気になった。

なんだかんだいって、梨衣夜ちゃんも幼馴染みの子のこと結構好きみたいだし。

あーけどなあ……うちが言うのもどうかと思うけど、あの子も結構

……まあ、あれだし？

あの子、絶対声優になったら凄く売れるだろうな。

声も結構可愛いし——まあ低いめの声は苦手らしいけど。

そういえば、本人も『声優になりたい』みたいなこと言ってたっけ。

……次のイベントはバレンタインかな？

また一緒になんかやるうか。

オリジナルの原稿にするんなら、知衣^{ちい}さんに頼むまなきや。

明日一緒に話そうと。

海

「じゃあお先に、お疲れ様っす」

「……」

リン、とベルが鳴ると同時に思わず溜息をついた。

また言っちゃった……やれやれ。

「はあ」

「海さんも、もうちょっと素直になればいいのにー。亮也くん、鈍感そうだから嫌われてると思うっちゃうかもしれませんよ？」

「……知衣さん、着替えてきたらどうですか、てか着替えてきてください」

「はいはい」

知衣さんは多分気づいてるだろうな。

不本意ながら、わたしがちょっと新野くんにあるって。

誰が楽しくてあんなロリコ——おっと。

……だって新野くん、小さい子が来る度にニコニコしちゃって、凄い笑顔なんだもん。

まあ純粹に子供が好きなんだってのは分かるんだけどね。

多分、将来の仕事は保育士とか、小学校の先生とかだろうなあ。

うわ、なんかリアルに想像できる……。

*

5時半まで知衣さんの質問の嵐に必死に耐えた後、慌てて着替えてコンビニを出た。

結構雪が降ってきて、近くに止まってる車にはうっすらと積もり

始めてる。

通りを歩いていた高校生くらいの子が転びそうになっていて、「ちよ、音歌大丈夫？」と、隣の子が声を掛けていた。

「……………もしもし？」

『あ、姉貴、バイト終わったの？』

「うん、今から帰るから」

『分かった』

弟の返事の向こうで、聞き覚えのある声と音楽が聞こえた。これは……………

「……………梨衣夜来てる？」

『うん、あ、けどもう帰るって。チャットするってさ』

陸の奴、チャットに負けてやんの。

この子もなかなかややこしい関係の只中にいるらしい。

まあ、わたしにアドバイス出来ることなんか皆無だけど。

「そか、じゃあよろしく伝えて」

『オッケー。んじゃ』

電話を切って目を上げると、見慣れたような見慣れていないような背中が視界に入った。

……………。

「……………可愛いなあ、天使だ天使！」

うわ。

えーっと、これはどう反応すれば……………。

「新野くん、あなた変態にしか見えないわよ」

「……木之下さん？」

あ、焦ってる。

多分わたしも焦ってる。

だってほんとに、一人で笑ってあの台詞って、変態に見え——うん。一体何見てたんだろう、と不思議に思っていたら、新野くんの膝の上に白い塊が乗っかってるのに気づいた。

「それ、何？」

「あ、さっき会ったんですよ！ 可愛いでしょ？」

嬉しそうに両手で抱き上げられたのは、ちっちゃい子犬だった。

……確かにこれは可愛い。新野くんじゃなくてもあの反応できるかも。

思わずしゃがんで頭を撫でたら、ペロっと舐められた……可愛い、可愛すぎる。

「会ったってどういうこと？ もしかして……」

「捨てられちゃった、みたいです」

突然オクターブくらい声が低くなって、思わず目を瞬いた。

なんか、一瞬で雰囲気変わったけど……もしかしなくても怒ってる？

「信じられます！？ こんなに可愛いのに！ こんな寒い中に捨てるなんて……僕には信じられません！」

「……家庭の事情って奴じゃない？ まあ許しがたい話だけど、分からないわけじゃない」

新野くんが、そつと子犬の頭を撫でた。
……優しいんだな、新野くん。

「……どうするの？」

「僕が飼ってあげようかなって思ってた」

「名前は？」

「まだですけど……あ、木之下さんがつけてくださいよ！」

いつの間にか口調が元に戻っていた。

つて……え、新野くん今なんて言った！？

「え、わ、わたしが！？」

「……駄目ですか？」

ねえ、その目は反則。

まるで子犬二匹に見つめられてるみたいで、思わず頷いちゃったけど……どうしよう？

……あ、そうだ。

「ソラ、とか」

「あ、もしかしてお名前の海^{かい}から、海^{うみ}と空ですか？」

「まあ……弟の陸も入れてね。後は……この子が綺麗な空を見れるように、かな」

こんな寒い日に捨てられるなんて、もしかしたら分からないけど、この子も辛い思いをしてるかもしれない。

けど、新野くんなら大丈夫かな、きっとこの子は幸せに暮らせると思う。

わたしの中の幸せな生活って、綺麗な空があるイメージなんだよね。

「……いいですね！　ね、キミの名前はソラだよ！」

新野くんが嬉しそうに子犬——ソラに話しかけると、ソラはワンとほえると、新野くんの頬をペロペロと舐める。

雪が降っていて寒かったけど、心の中は暖かった。

今年は……いいクリスマスだな。

知衣

「……誰も来ないね」

「来ませんねー」

せつかくのクリスマスだったのに、あたし何やってんだろ、ってちよっとだけ思っちゃった。

まあ、別にバイトが入ってなかったとしても、あたしには彼氏なんかいないし？

今まで毎年一緒に過ごしていた親友は、大学卒業したら結婚するかもとか言い出すし……てか大学生なのに小学生の娘がいる人が交際相手ってどうなんだろ。

あーけどそういうのもありなのかなあ……駄目だ、上手く書けそうに無い。

とにかく、一人で過ごすクリスマスなんて初めてだ。

「……中田さんももうあがっていいわよ。今日はあんまり来ないでしようし」

「え、いいんですか？」

「もうすぐ次のシフトの人も来るんじゃないかしら」

「……まあそうですねー」

*

というわけで、コンビニを出てきちゃった訳なんですが……

「暇、だあ」

毎年深雪と一緒にいたからな。

彼氏とか出来そうに無いし、チャットするにも時間的に……もう解散してるかなあ。

あーもー、深雪の馬鹿あー！

「シングルベル、か……」

チャット仲間の歌音ちゃんが言っただのもよく分かる。

くっそー、一人楽しすぎるぜー……なーんて、何言っただか。

とか思っただけを曲がろうとしたら、勢い良く向こうから走ってきた通行人Aと正面衝突した。

……うわあ。

「いったあ……！」

「わ、ご、ごめんなさい！ 大丈夫ですか！？」

すっかり慌てた様子で手を差し出されたから、ありがたく甘えることにしようか、断るのも悪いし。

立ち上がってみれば、通行人Aはずれていたサングラスを掛けな——ん？

「……あ、もしかして貴方ふぐっ」

「わーっ！ ちょ、悪いけどそれ言わないで！」

すっかり慌てた様子で口を抑えられて、思わず目を白黒させる。

通行人Aは、どうやら今結構有名な感じの俳優さんだったりしちゃうようだ。

なんせ最近のドラマとかにはてんで明るくないあたしが知ってるくらいだもんね。

………なんてベタな展開。身をもって体験する羽目になるとは。

「ほんとにゴメン、えつと、とりあえずどうしよう、修次しゅうじってよんでもらっていい？」

「それって偽名ですよね」

「うん偽名」

さらつと言いやがったよこいつ。

通行人A、もとい修次……くん——でいいのかな——は、「怪我とかして無い？」と心配そうに聞いてきたから、とりあえず首を縦に振っておいた。

いったってしりもちついただけだし、ちょっと吃驚して声を出しはしたけど、別に大して痛くないし。

「そうだ、この辺りであんまり目立たなさそうな店とかあるかな？」

「……静かにクリスマスを過ごしたいって訳ですか」

「そういうこと！」

なんか……テレビ越しと直接会うのじゃ随分印象変わるな。

テレビで見るよりも子供っぽい雰囲気……。

けど、これっていい体験だよね！

かなりベタな展開だけど、やっぱり体験第一だよね！ よし！

「案内しましょうか？ むしろ一緒にいいですよね？」

「え、いいの？ ありがと——って、わ、ヤバイかも」

目を輝かせて喜んでいた修次くんが、突然真顔に戻ると——さすが、やっぱりかっこいい——、帽子を深く被りなおして、突然手をつかんだ。

え、何急に！？

「誰か来たかも。とりあえず撒くね。悪いけど付き合って！」

走り出した。

別にいいんだけどさあ……返事くらいさせてよね！

「雪積もってるから、気をつけて！」

「分かった、そっちも——ごめん、キミの名前聞いてなかった！」

あ、ホントだ、忘れてた。

思わず吹き出しそうになりながら、スピードを緩めて振り返った修次くんに向かって口を開いた。

「あたしは知衣。中田、知衣」

「知衣ちゃんか、いい名前だね。よろしくっ」

「こちらこそ！」

二人同時ににっこり笑って、雪の降る中、大きなツリーの横を駆け抜けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1345j/>

ホワイトクリスマス

2010年10月28日03時02分発行